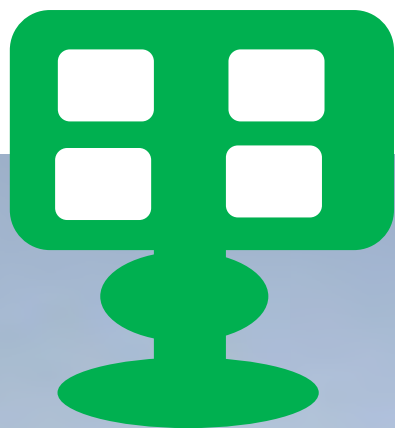


第1号 2011年2月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課  
〒060-8588 札幌市中央区北3条西6丁目  
TEL 011-231-4111 / FAX 011-232-4128  
E-mail:nosei.noson1@pref.hokkaido.lg.jp



づくり



喜茂別町内から見える羊蹄山

## CONTENTS

- 地域づくりリレーインタビュー／北海道武蔵女子短期大学・松木靖氏  
「地域づくりは、地域の良さを発見し、住民自ら決めること」
- 北海道里づくりアドバイザーレポート 当麻町 小野寺 孝一氏
- 実践！地域づくり 「喜茂別町喜茂別地区」
- BOOKS 『ハチドリの一としづく ～いま、私にできること～』
- トピックス

—一人に学び、地域に学び、いまできることから始める—

地域づくりは、地域の良さを発見し住民自ら決めること

地域づくりはお金ではない価値がある

北海道武蔵女子短期大学准教授 松木 靖 氏



松木 靖 (まつき やすし)  
昭和36年、中富良野町生まれ。平成2年、北海道大学大学院農学研究科博士後期課程単位取得退学後、株式会社酪農総合研究所研究員、北海学園北見大学助教授などを経て現職。

第1号は新生指導員だよりの皮切りとして、北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会委員長の松木靖さんにインタビューしました。(本文中、敬称略)

—現在の農業・農村の状況についてどう思いますか？

松木／二十年前くらい前から考えていることがあるのです。特に米地帯で、農家の元気がない。それは、米価が下がったからではなく、米の生産調整が始まり、自分たちが頑張っても評価されないから。昭和二桁の世代は、食料増産が命題だったため、豊作になったら誉められました。自分たちの努力が国民の生活を豊かにし、高度経済成長によって自分たちの懐もうるおうなど、実感できました。それが、豊作になっ

たら食管赤字になる。いくら作ってもお金をやらないという政策になり、努力が報われなくなりました。

—具体的には？

松木／昔、雨竜町の農業振興計画の策定に関する検討委員会に呼ばれたことがありました。検討会のメンバーの1割は農家でした。この中で、一緒に参画していたコンサルが農家の子どもである中高生に聴き取り調査をしたことがありました。「君たちは、農業を継ぐ気はないのか？」という質問に、彼らは、「うちの母さんや父さんから、農業はきつい、儲からないとさんさん聞かされているのに、何であんたはそんなことを聴くのか？」とかみつかれたそうです。元気をなくしている親を見て、その子どもが農業を継ぐことと思いませんよね。

—昨今はTPPなどの議論においても農業への風当たりが強いようですが。

松木／農業がなければすぐに加盟できるのにといい意見もあって、農業だけが悪者のような感じで見られたりしていますね。

—農家に元気がなければ、農村も元気がなくなりますが？

松木／昔は若手農業者の活動組織である4日クラブやフレッシュユミセス、地

域の多様な若者たちが入った青年団などがあって、活発に活動をしていました。青年団には消防団員もいて、地域活動の中核になっていました。しかし、今は4日クラブも皆が集まる大会では農業高校が大半を占めるようになり、若者は集まりたくても集まる場所がなくなりました。

—このような農村の元気を回復させるためにいろいろな取組が見られますね。

松木／昔、北見で学校給食に地元食材を入れたということ、検討することになりました。それまでは、地元業者が納入していましたが、市場で前日までのせりで残った野菜を安く仕入れて、お弁当屋や給食用に納入することもありました。食材はその日のうちに使うので、少しくらい日にちがたついても大丈夫という考えです。それはそれで合理的かもしれませんが、市役所が仕掛けて、農家などを集めました。視察にも行きましたが、隣の町に見に行ったのが一番勉強になりました。一般的に、近くにはあまり見に行かないですね。会議を重ねましたが、お父さんたちの態度が煮え切らない。一戸当たりの農産物の取扱量からいって、学校給食の食材の量は非常に小さい。一日当たり、ハクサイやレタスが一個ですからね。それなら、市場に出した方がよいという考えです。でも、それにしびれを切らして、お母さんたちが怒ったんです。「あんたがたの話を

聞くと腹が立つ。やるでも、やらないでもない。やってみればいいではないか。やってみなければ何も分からない。」

—女性は決断が早いんですね。

松木／男性はとかくビジネスに目が向かいがちです。しかし、女性はやりがいたどかを求める傾向にあります。

—北見はその後どうなったのですか？

松木／一年経過し、総括会議を開きました。農家八名のグループで行ったのですが、収入は平均して十数万円程度。多い人でも二十万円くらいでした。毎日交代でお父さんたちが学校に届けました。金額的には割に合わなかったわけです。

—うまくいかなかったのですか？

松木／「止めますか？」と聞きました。そうしたら、そうではないんですね。その日採ったハクサイやレタスを届けると、学校の調理人が驚くわけですよ。こんな立派な野菜は使ったことないと言われる。そして、昨日届けてくれたハクサイやレタスを子どもたちは残さなかつたよと言われる。誰が、どういうふうにつくっているのか子どもたちの前で話をして欲しいと言われる。お父さんたちが、子どもたちや調理人に直接ふれて変わるわけです。所得的には豊かにならないけど、お金じゃないよねとなるのです。

—他の人から評価されると嬉しい？

松木／自分のことはなかなか自分では分からない。同じように自分たちの地

地域の良さは地元の人には分からないことが多いのです。

—具体的な例はありますか？

**松木**／美唄市の中村地区は好例です。中村では最初、資源探査をやりました。すると、菱沼の湖畔で写真を撮っている人がいました。地元の人皆、何故こんなところで写真を撮っているのかと不思議に思いました。すると、ここは非常に眺めが良いし、この沼には稀少なトンボもいるんだと教えてくれました。そこで、住民たちが菱沼を何とかしようと『中村ワーク』という住民活動組織を立ち上げたのです。その後有名な中村の鳥めしも活動メニューに加わりました。

—中村地区の住民たちの活動の原動力は何なのでしょう？

**松木**／中村地区は、元は学校も農協もあって、一つの完結したコミュニティを形成していました。それが、学校が廃校になり、農協も統合され、地域のアイデンティティが失われようとしていました。鳥めしなども地域のアイデンティティの再生なのではないでしょうか。

—地域のアイデンティティをつくることは重要ですね。

**松木**／酪農地帯では、わが村のチーズとして第三セクターなどでもつくっているところがあります。東藻琴でも長いもの地ビールをつくったから飲んでみてくれと言われたことがありました。

地元の人を買って持っていくおみやげをつくりたい。地域の誇れるものをつくりたいという思いがそうさせるのではないのでしょうか。現在、道内で行われている地域づくりの8〜9割はこのような地域の誇りづくりだと思います。—地域づくりの意欲を高めるためには、まず、地域の良さに気づくことが大きいのですか？

**松木**／沖繩に行ったときに、地元の人に、「沖繩は年中暖かくていいですね」と聞いたら、「年中緑なのもうっとうしい」と言われました。札幌の雪祭りなども、雪を見にわざわざ何でこんなに大勢が来るのかと思いますよね。自分たちが気づかないところを、外の人から言われて気づく。観光学でいうところの『他者のまなざし』が必要であると思います。

—住民の意欲を高めるために、具体的にどのような方法がありますか？

**松木**／私のやり方は、何回も話し合うことです。ブレインストーミングをやります。そのときには、特定のテーマは決めません。好きなことを話してもらおう。「この町のいいところって何？」「何が一番の問題なの？」といった具合で皆の発言を引き出します。絶対に発言に対して批判的なことは言わない。これがルールです。そうすると本当はこんなことができたらいかなどと本音が出てくるようになる。そして、大切なことは、自分たちで決めてもらうこ

とです。全員で話し合って、皆で決める、『集団討議、集団決議』のルールが重要です。多数決になっても皆が自主的に受け入れるならばいいのです。

このような話し合いに役に立つ技術として、ファシリテーションというのがありますが、こういう技法も学んで欲しいですね。

—強いリーダーシップで住民を導くという方法もあると思いますが？

**松木**／自分の考えを押しつけることは良くありません。そういう人は自分一人で活動すれば良いと思います。よく自分が引く張らないとダメだと思いがいますが、そうなると思う人が抱え込んでしまつて行き詰まる。率先垂範とは、自分一人で全部することではないのです。

—北海道里づくりアドバイザーの役割にも関わっているとありますが？

**松木**／地域をどうするか、これを時間をかけて繰り返し繰り返し話し合うことが必要ですが、話が堂々巡りにならないように誰かがリーダーシップしなければなりません。これを是非里づくりアドバイザーにはやって欲しいですね。こんなことをやろうとポンと住民に投げかけてもなかなかついてきません。住民の本音の発言を引き出し、皆が自分たちの問題としてやる気になるように導くことが重要だと思っています。

—『他者のまなざし』により地域の良さに気づいてもらいながら。

**松木**／そのとおりです。やり方は、地域づくりの目的やその時の状況によってまちまちで、決まりはありません。一つの方向に持って行こうと考えず自分たちの地域の良さに気づいてもらいながら、皆が何回も話し合う場をつくってあげることです。

—最後に、北海道里づくりアドバイザーに対してひとことお願いします。

**松木**／私が良い制度だと思いが、「北海道HACP自主衛生管理認証制度」です。8段階のステップがあり、衛生管理状況を自己採点して、現在の状況を把握します。一段高い目標を持つことにより、自主衛生管理の向上が図られ、7以上になってハサップの認証を取ることが可能となります。北海道里づくりアドバイザーの活動もこれと同じだと思います。いきなり高いレベルの取組を行おうとしても無理があります。できることからステップアップするのが良いのではないのでしょうか。経済的にうるおうことや交流が活発になるだけが活性化ではありません。お金では測ることができない誇りややりがいのようなものが重要だと思います。このような目的意識を持って、地域に関わって欲しいですね。そして、ファシリテーションなどのテクニクも機会を見つけて勉強して欲しいと思います。

—有り難うございました。

# 北海道里づくりアドバイザーレポート



今回から、各地域で活躍されている北海道里づくりアドバイザーの方にスポットライトを当てて、活動のご紹介や、地域への熱い思いをお話していただくこととしました。記念すべき第一回は、北海道ふるさと・水と土指導員会の会長でもある、当麻町の小野寺孝一さんです。小野寺さんは、当麻町生まれの当麻町育ち、昭和四五年当麻農業協同組合に就職し土地改良事業に従事、その後昭和四四年当麻土地改良区に異動し、現在も当麻土地改良区参事として活躍されています。

今から、各地域で活躍されている北海道里づくりアドバイザーの方にスポットライトを当てて、活動のご紹介や、地域への熱い思いをお話していただくこととしました。

小野寺さんの活動は、小学生を対象とした「田んぼの教室」です。平成一三年から改良区が所管する施設の見学会を始めましたが、「あまり面白そうじゃないんだよね」とのことで、様々なメニューを取り入れて実施して、北海道土地改良事業団体連合会のバックアップも得て子ども達の興味を引くような活動に仕立て上げて来ました。今では、四年生には施設見学会、五年生になったら「田んぼの教室」として育苗からお米を食べるまでの過程をすべて体験させています。融雪期には、用水路の掃除をしながら水路を歩き、育苗ハウスを見学、春には農家から借りた田んぼでの田植え体験、夏には田んぼの生き物調査、秋

には鎌で稲を刈って、はぎがけ、落ち穂拾いまでします。農家の方が、天日干しした稲を脱穀・精米をしてくれて、学校の授業で自分たちが作ったお米を食べるところまで行っています。二月には実際に学校に向いて、一年間の活動のおさらいをする出前授業の先生もこなしています。まさに、本格的な食農教育と言えるでしょう。田植えを始めた時は、子供達はなかなか泥の水田に足を踏み入れたがりませんでしたが、「みんなで田植えをしよう」と声をかけると、恐る恐る田んぼに入りだします。「そのうちみんな夢中になって泥だらけになって田植えを楽しんでる」状態になりました。田ん

ぼの教室に行く五年生を見て、下級生達は「早く五年生になって田んぼの教室をやりたい」と言うようになるくらい定着して来ました。

「実は田んぼの教室はそんなにお金がかからないんです」と小野寺さんは言います。農家の方も喜んで田んぼを貸してくれるし、田植えの準備もしてくれる、収穫したお米の脱穀・精米もしてくれとても協力的です。

ただ、児童を田んぼまで移動させるバス代が、「わずかな時間しか使わないんだけどこれが結構高いんだよね」と悩みの種でしたが、町教育委員会にお願いして、年間七回程度、無償でスクールバスを提供していただけるようになりました。

田んぼの教室をしていて、最も気になるのが「農家のお子さんが数人しかいない」ことです。農業の町「当麻町」にも関わらず、農家のお子さんがないことに危機感を覚えています。「児童から聞いた話ですが、最近はお米をどぐのに洗剤を使う親もいるそうですよ」とびびくりしています。

そんな小野寺さんの夢は、「子ども達に農業の良さを知って欲しい」、「田んぼの教室の経験者から一人でもいいから農家になってくれれば」です。田んぼの教室の第一期生は大学生になる年代になりました。道立農業大学校に進学する子もいるので、「卒業後は当麻に戻ってきて担い手になってくれれば」



田んぼの教室での稲刈りの様子

と期待しています。たとえ、当麻を離れてしまっても、「当麻町に住んでいた時、田んぼの教室で田植えとか稲刈りとかしたなあ」と思い出してくれるだけでも良いと小野寺さんは言います。

当麻町も農家の高齢化が大きな課題です。「町には二千七百ヘクタールの水田があり、これを今は四百戸の農家で営農をしています。高齢化は進んでいるし、二〇歳代、三〇歳代の農家がいないと農地が守れなくなる」と危惧しています。

近年、農業後継者不足が問題となっていますが、当麻町では平成一五年頃より毎年一〇人前後の新規就農者があり、平成一五年から平成二二年まで七九名の方が農業を始められています。

北海道農業担い手育成センターの紹介で当麻町に農業研修に入り、当麻

が気に入ってそのまま就農する人が多いのです。新規就農者は、ほぼ町内農家の出身者ですが、町外からの方もいて元競輪の選手、大手デパートの社員、大手衣料販売チェーン店店長など前職も様々です。

研修生受け入れ農家も熱心に指導していますし、就農する場合は町、土地改良区、農協、ベテラン新規就農者で構成する新規就農調整会議で審査し受け入れるかどうかを決めています。

新規就農者の方は、水稻はもちろんのこと、でんすけスイカ・キュウリ・トマト・たまねぎ・じゃがいもなどの蔬菜、菊・バラなどの花卉など様々で、有機農業にも取り組んでいます。

新規就農者のバックアップをするのも、小野寺さんの仕事です。土地改良区の職員としても水需要の動向や当麻町での暮らしなど様々なことに気を配っています。町全体でも農地を守ることに真剣で、離農の噂があれば農業委員さんが筆頭になり関係者がすぐ動き出します。当麻町の農地を守る活動の先頭に立って小野寺さんも活躍しています。

町全体が農業・農村を守る体制作りにも熱心に取り組んでいます。町の農林課・農業委員会・土地改良区・農協・共済組合・農業センターが一つの建物に入り、週に一回は農業合同事務所連絡会議を開催し情報の共有化を図っています。何か問題が起きても同じ建物

の中に関係者がいますから、対策・対応がすぐに打てます。町の農林課は森林も所管していますから水源涵養の森の話もすぐに解決できます。さらに、二週間に一回、関係機関と農業改良普及センターも参加し、営農情報交換会を開催し、そこでは病害虫の発生状況、気象情報、栽培方法、改良区からは水の供給など様々な話題が提供され、緊急時には防災無線で全町に周知し農業関係者一体となった農家への支援が可能となります。この取組は平成一五年から始められましたが、当時は道内外から多くの方が視察に来たようです。

#### 【きらり当麻町自慢】

小野寺さんが活躍している当麻町は、旭川市から北東へ約一五kmの距離に位置し、農業を基幹産業とした町です。特に、水稻においては北海道農協米対策本部による米ランキングで十二年連続北海道一を継続しています。

小野寺さんが以前から懸念していたのは、「いろいろなイベントを開催するが長続きしない」ことです。商工会青年部や農協青年部などが中心となつて冬のイベントをたちあげるものの資金難から途中でやめてしまうことが多いのです。壮瞥町で開催される昭和新年国際雪合戦大会予選を当麻町でやるとうとうということになり、小野寺さんは「日本雪合戦連盟B級公認審判員」の資格も取り本格的に応援していましたが、今は実施されていないとのこと。

小野寺さんは「イベントもいければ、当麻には豊かな農産物、農村景観のみならず伝統文化・伝説や鍾乳洞など多様な地域資源があります。『継続は力なり』ですから、これらを活かした長続きするような活動にしなければ」と言います。

そんな小野寺さんの今後の夢は「田んぼの教室も続けながら何か新しいことをやりたい」です。

平成二二年十月に道営事業の客土土取り場跡地である「子ども達が百本の桜・ミズナラ・シラカバの苗木を植樹した場所に、何年後かに成長した木の間にはフットパスコースを作つて、将来、木を植えた子ども達を集めて楽しみたい」と語っています。「当麻町には森林組合があり、そこで製造されるチップで散策路を作り、夏は森林浴、冬はクロスカントリースキーのコースとして使用できる。オランダでは地盤が低くポプラのチップを何層にも積み重ね、何百年間もかかり道路を造成して来たと聞きましたが、そんな風にしてみたい。田んぼの教室も土地改良区を退職した後も携わって行きたい」と、当麻町へのこだわり、ふるさと当麻町への愛着が垣間見られます。

小野寺さんは、指導員会会長として里づくりアドバイザーの方への熱い想いを送ってくれました。

「里づくりアドバイザーは、市町村長や北海道土地改良事業団体連合会会

長からの推薦で、地域づくりの中核的存在として北海道農政部長から委嘱されているものです。その意識を強く持つて、研修会や指導員会には積極的に参加し、学んだことを仲間も増やしながら地域で実践し、ふるさとや農業・農村を守る活動を活性化していきましよう。首長たちとも、今後の地域づくりについて語り合つて欲しいと思つています。指導員会設立から5年が経過しようとしていますので、今後は指導員会幹事会・指導員会を通じて皆さんの協力を得ながら自主的な運営をしていきたい」と考えています。

#### 北海道里づくりアドバイザーとは…

農村地域の活性化に理解と熱意があり、地域住民活動の推進において中核的役割を担うことができる方を、市町村長や北海道土地改良事業団体連合会長からの推薦により、北海道農政部長が委嘱しています。全道各地の市町村においてボランティアで活動していただいています。

## 実践！地域づくり

### 心の故郷づくりを目指して～ホタルの保全・再生～

#### 喜茂別町喜茂別地区の取組

後志総合振興局管内喜茂別町では中山間ふるさと・水と土保全対策事業を活用して、ホタルの保全・再生を通じた喜茂別町の心の故郷づくりに取り組んでいますが、事業に取り組むことになったきっかけなどについて、事業実施のリーダーとして活躍されている北海道里づくりアドバイザーの遠城論史さんと青年交流セミナーの白川博順さんにお話を伺いました。



右が里づくりアドバイザーの遠城さん、左が青年交流セミナー事務局の白川さんです。共に喜茂別町役場職員の方です。

喜茂別町は、昭和三〇年代後半から徐々に過疎化が進み、二〇一〇年四月末で人口が二四人一人となっています。町内に六校あった小学校も現在は一校に減少し、少子高齢化が進んでいます。基幹産業である農業でも担い手不足が進み、農家人口も年々減少しており、持続可能な農業・農村の維持が懸念される状態となっています。

このような中、町民によるまちづくり活動を行うため、町職員や商工会青年部、農協青年部、社会福祉法人など異業種の若手を中心となり、一九九〇年に「青年交流セミナー」が発足し、学び・考え・行動することを通じ、人づくりやまちづくりを目的として活動しています。

青年交流セミナーは、清流日本一の尻別川クリーン作戦や子ども達を対象としたそばの種まきから試食までの体験活動などを実施するなど、町民や子供たちが地域の農業や自然環境を守る活動に興味を持ち、農村づくりに参加してもらおうと積極的に活動しています。

青年交流セミナーの事務局も務めていた遠城さんは、里づくりアドバイザーとして、平成二二年度に実施された指導員会に出席しました。指導員会では全道の里づくりアドバイザーから活動の状況や今後の活動の抱負などについて意見交換会が行われましたが、他の方の活動状況やふるさとに対する

思いを聞いて感銘を受けました。「自分も里づくりアドバイザーになって四年度、地元で何かしなければ。地域おこしをしたい。」という思いがふつふつと湧いてきたのです。「高校も廃校になり中学を卒業すると喜茂別に拠点が無くなる。喜茂別にずっと住んでいたくてもこれといった仕事も無く、就職のため出て行く人も多い。町を出て行く人にも喜茂別の心の原風景を残してあげたい」と思いがこみ上げ、指導員会で聞いた沼田町の里づくりアドバイザーの野道夫さんのホタルを通じた取組みを参考にしようと思われました。「沼田町も喜茂別町と同じ過疎の町、でも野さんは子ども達を巻き込み何十年も一生懸命ホタルの保全・再生に取り組んで大成している。ホタルは環境のパロメーターとも言われるし、自然豊かな喜茂別町でもできるに違いない」と事業に取り組もうと決心しました。

事業の実施に当たっては、喜茂別町のイベントを一手に引き受けて実施している「青年交流セミナー」の協力を取り付けました。青年交流セミナーは、地域観察会やセミナー農園、冬の花火大会など子ども達と一緒に行う行事をたくさん手がけていました。白川さんによると、「ほとんど土日がないような状況」で熱心に活動しているのです。「ちなみに、冬の花火もセミナーの会員に花火師がいて、自分たちで打ち上げるんですよ」とのこと。多彩な人材

がいるというのは、異業種交流団体の強みです。



喜茂別町特産アスパラガスのイメージキャラクター「アス男とパラ子」です。2人仲良く手をつないで「アス(明日)はパラ(アス)！」

平成二二年度は、喜茂別で本場にホタルが広められるのか、そもそも生息するのか、どこにどれくらいいるのかなどの情報収集に取り組みました。青年交流セミナーの人脈でいろいろな情報が集まってきました。もともと喜茂別にはホタルが生息したという話は聞いたことがありましたが、「うちの裏の沼で見かけた」「旧高校の裏にいるよ」など実際に生息していることが確認されました。

実際にホタルが生息していることが確認されたことから、ホタルの生息の管理方法やホタルの生息についての学習会を開催しました。学習会には、きっかけを作ってくれた沼田町の野道夫さんを講師にお招きし、ホタルの生息が確認された地区の植生状況、街灯設置状況、ホタルが捕食するモノアラガイの生息状況の確認、管理の方法などの助言を受けました。

夜には、観察会を行う予定でしたが、あいにくの大雨で実現できませんでした。野

さんから、ホタルの生態についての説明、水質検査などを行いました。参加した小学生も熱心に野さんの話を聞き、リトマス試験紙や、COD試験による水質検査には目を輝かせて実験に取り組んでいました。

「講師との連絡調整や旅費の負担、その他試料の購入など後志総合振興局がすべてやってくれ、地元負担も無くとても助かりました」と事業を活用して良かったと実感されています。

喜茂別町は、羊蹄山、清流日本一の尻別川が周囲に位置しており、基幹産業である農業が織りなす季節感あふれる風景を眺望できる地域です。今回、ホタルの生息が確認されたことから、地元に残りたくても残れず出て行く人にとって、喜茂別の景観やホタルが心の原風景となるような活動に発展させていきたいと考えています。

喜茂別は、ニセコや洞爺湖温泉に向かう旅行者の通過型の場所ではありますが、遠城さんや白川さんは、「郷の駅や農村景観、ホタルなどを鑑賞するため立ち寄ってもらうだけでもいいし、それで喜茂別を知って欲しい」、「町民の皆さんが、喜茂別に住んでいて良かったと思えるような地域づくり、町民の皆さんが町外の人に『喜茂別は良いところ』だよと言ってくれるような活動をしていきたい」との想いがあります。

今年の活動を通じ、学校の先生や町

外からの移住者など青年交流セミナー構成員以外の方にもホタルに興味を持ってもらうことができたので、今後は子供からお年寄りまで様々な年代の方に自主的に参加してもらい新たな活動団体の立ち上げを模索しています。そのためには「もっともっと町民の皆さんに浸透させたい」と語っています。

将来的には、環境のバロメーターであるホタルをモチーフとして農産物のパッケージに活用したい、安全・安心な農産物のブランド化も図っていききたい、全道ホタルサミットを開催したいなど夢も大きいですが、基本は「喜茂別町の宝として、町民の皆さん、喜茂別町にかかわる皆さんが誇りに思えるような活動にしたい」というのが遠城さんと白川さんの一番の願いです。



喜茂別町の郷の駅「ホツときもべつ」内の商業施設「アスペーラ」。地元の特産品のほか道内各地の特産品も販売しています。「アス男とパラ子」もここで売っています。

## 中山間ふるさと・水と土保全対策 事業とは…

農業・農村の有する多面的機能を良好に発揮させ、農村の活性化を図るため、地域の人たちが主体性を持って行う多様な活動を促進し、持続可能な地域づくりを進めることを目的に北海道が実施している事業です。

多様な活動とは、地域の魅力的な資源を活かした、都市との交流や自然環境の保全・再生、食品の加工、料理開発・普及、環境教育など様々で、これらの活動に要する経費、例えば、講師

の旅費や謝礼、先進地視察のためのバス代、料理講習会のための食材の購入費・会場使用料などを北海道が直接支出します。

詳しくは、北海道各総合振興局・振興局産業振興部調整課・農村振興課、または北海道農政部農村振興局農村整備課田園整備グループにお問い合わせください。

## BOOKS ~地域活性化活動のヒント~

### 『ハチドリの一としづく ~いま、私にできること~』

辻信一・監修

南アメリカの先住民に伝わるわずか17行の物語に世代を超えた共感の輪が広がっている。文化人類学者で環境運動家、スローライフを提唱し、100万人のキャンドルライトの呼びかけ人でもある辻信一氏が、原典の趣旨を崩さないよう注意深く訳したこの物語は、非常に内容が深く、あまりに多くのことを考えさせられる。

ハチドリは、北米や南米に生息する花の蜜を主食とする小さな美しい鳥で、「ブンブン」とハチと同様の羽音を立てるため、ハチドリ（蜂鳥）と名付けられた。

ノーベル平和賞の受賞者であるケニアのワンガリ・マータイさんも「ひとりひとりがハチドリなの。そんな自分を抱きしめてあげてほしい。」とあってハチドリの物語を世界中に広めている。

本の中では、「地球温暖化という大問題に直面している」状況の中、現代の“ハチドリ”たちとして、坂本龍一、中嶋朋子、C. W. ニコル、セヴァン・スズキ、関野吉晴、枝廣淳子・・・なども登場する。

今回改訂した指導員だよりのコンセプトでもあるこの本は、地域づくりを進めるうえの哲学として、欠かせない一冊である。

■発行：光文社 定価：1,200円（税込）

問い合わせ：TEL03-5395-8125

## トピックス

### ○「地域づくり研修会」を開催

平成22年10月1日（金）、札幌市の札幌エルプラザホールにおいて、「地域づくり研修会」を開催しました。道内各地から北海道里づくりアドバイザーの皆さんや、行政職員、土地改良区職員のほか、地域のリーダーなど150名以上が参加しました。

この研修会は、持続的で効果の高い地域づくりを行うための基本的な考え方や具体的な取組方法を学ぶことを目的として、昨年から実施しています。

今回は、石川県羽咋市農林水産課1.5次産業振興総括主幹の高野誠鮮氏から「どんな地域でも再生の可能性はある！～限界集落脱却に向けたプロデュース～」、兵庫県農政環境部農業改良課環境創造型農業専門員の西村いつき氏から「コウノトリ育む米を創る！～生物復帰を活かしたブランド戦略～」と題してご講演いただきました。また、講演に続き北海道武蔵女子短期大学経済学科准教授で北海道ふるさと・水と土保全対策委員会委員長の松木靖氏をコーディネーターにむかえ、講演を行った両氏とともに「地域再生をもたらすために必要なこと」と題したパネルディスカッションを行いました。

講演は、具体的事例に基づくわかりやすい内容で、高野氏からは、「可能性の無視は最大の愚策である。1%でも可能性があれば、とにかくやってみよう。」と、西村氏からは、「何も無い地域にも必ず地域を救う資源がある。努力の先には必ず光がある。」とエールが送られました。また、パネルディスカッションでは会場から多くの質問が出されるなど、参加者の地域づくりに対する関心の高さもうかがえ、今後、地域での実践が期待される研修会となりました。



### ○第17回「ふるさと・水と土基金」全国研修会（東京会場）を開催

ふるさと保全ネットワーク（全国水土里ネット）主催の第17回全国研修会の情報提供啓発コースが東京の国立オリンピック記念青少年センターで10月14・15日に全国から約120名の参加のもと開催されました。初日は岡山大学名誉教授目瀬守男さんによる「住民参加による地域活性化戦略」などの講演などが行われ、2日目は全国3地区の地域づくりリーダーによるパネルディスカッションが開かれました。雨竜町の里づくりアドバイザーの外山陽一さんがパネリストとして招かれ、雨竜町の「暑寒パストラル」の取組みについて説明し、参加者から賞賛の声が上がっていました。なお、羽幌町及び浦河町の北海道里づくりアドバイザーも参加しました。

### ○ 現地研修を開催

平成22年11月17・18日と南富良野町及び旭川市西神楽地区で、北海道里づくりアドバイザーを対象として、地域マネジメントや地域づくりの具体的な手法を学ぶ現地研修を開催しました。

南富良野町では、森林や農産物、豊かな自然を活かした取組や、観光・食・環境・福祉・農林業に携わる皆さんが連携し横の連携を密にした取組が行われていました。

旭川市西神楽では、地域リーダーが住民の皆さんの声を聞きながら、移住者の誘致や住民の手作りでパークゴルフ場を建設するなど、地域住民による自主的な活動が行われていました。

この研修を通じ、多様な人たちを結びつける場づくりや、自由な意見やアイデアを出すことができる話し合いの雰囲気づくりが重要で、これらが、地元住民のニーズに適った活動につながるのではないかと考えさせられる研修でした。



旭川市西神楽地区の住民の方が自らの力で造成したパークゴルフ場

#### 【編集部からのお知らせ】

これまで、「北海道ふるさと・水と土指導員だより」として発刊して来ましたが、読者の方により親しんでいただけるような内容に見直し「里づくり」としてリニューアルしました。地域づくり実践者の方のお話や北海道里づくりアドバイザーの方の活躍の様子など実際にインタビューし記事にしています。

また、北海道のホームページで、北海道中山間ふるさと・水と土保全対策事業の紹介もしていますので、是非ご覧になってください。北海道のHP「<http://www.pref.hokkaido.lg.jp>」にアクセスし、キーワード「ふるさと・水と土」で検索してください。

より良い紙面づくりのため、読者の皆さんのご意見・ご感想を募集していますので、FAX・メールなどで編集部までお寄せください。紙面でも紹介したいと考えています。今後とも、ご愛読よろしくお祈りします。